

28 【ななな】

【ななな】というおばけは、村でも有名なおばけでしたから、懐爺にきかなくとも知っていました。

あるとき、完ちゃんがやってきて、泣き声でいいます。

「級長（きゅうちょう）のしんちゃんが、【ななな】になっちゃった」

「ほんまかい、しんちゃんもかい」

しんちゃんも、というのは、その半年前に、つづけて、はなちゃんとしんちゃんが、【ななな】になってしまったからでした。

どうして【ななな】かというと、

「ななな」

とつぶやきながら、だれかれかまわず、すりよってくるからです。

ななな

ななな

なななんな

なんなんな

【ななな】にそばによられると、なにせ、くさいし、きもちわるいし、息がしにくくなる。

「ななな」

としかいわないから、はなしにならない。

「なんとかならんかのう」

完ちゃんがいます。

なんとか、しんちゃんを、もとのしんちゃんにもどせないか、という意味です。

「なんとかならんかのう」

とぼくもいつてから、

「かいじいに、なんとかしてもらうかのう」

とつぶやきました。

「それしかないのう」

「それしかないのう」

でも、なんとなく、今回ばかりは、[お礼]が必要な気がしました。

それで、母親に話したら、ふかし芋をもっていけというので、

「なんじゃ、ふかしいもかい」

とぶつくさいいながら、ふたりでふかし芋をかかえて、懐爺のところ
に行ったのです。

懐爺も、

「なんじゃ、ふかしいもかい」

というとおもったら、

「ありがたいありがたい」

と、ぼくらの話も上の空で、ふかし芋をたべつづけました。

二十本はあったとおもいます。

それをひとりでぜんぶたいらげると、は、

「眠い眠い、天国天国」

とつぶやきながら、祠の奥に消えてゆきました。

「なんじゃ、くいにげじやのう」

ぼくがそういうと、やさしい完ちゃんは、

「腹がいっぱいになったら、眠くなるもんよ」

というのです。

腹がいっぱいになったことのない、ぼくは、

「そういうもんかのう」

と信じられなかったが、しかたないから、おきてくるまで待っている
ことにしました。

一時間くらいして、懐爺はでてきましたが、眠っていたわけではなさ
そうでした。

手には腕をもっています。

腕のなかには、にがそうなまずそうなくさそうな、うんこ色の汁がは
いっています。

「これを、しんちゃんに飲ませなさい。【ななな】にとりつかれて、十日
以内なら、これで、【ななな】は退散しますよ」

「これはなんのしるかのう」

鼻をつまみながら、ぼくがきくと、

「ないしょですが、おふたりにだけ、特別おしえましょう。これは芋を
たべてたべてたべすぎて、はじめてできる秘薬（ひやく）です」

「うんこいろじやのう」

「はい、わたしの下痢の汁です」

「げげげじゃのう。【ななな】よりさきに、わしらが、たいじされるぞい」

「まあ、だまされたとおもって、はやくしんちゃんに飲ませなさい」

懐爺に背中をおされて、完ちゃんとぼくは、お椀をかわるがわる持つて、この秘薬とやらがこぼれないよう注意しつつ、しんちゃんの家に行きました。

翌日、しんちゃんは、いぜんと変わらぬ元気な様子で、学校にやってきました。

「あの汁、のんだんか。あんなもの、のめたんか」

完ちゃんが、しんちゃんに、きいています。

しんちゃんが、こたえています。

「くさくて、なんの、のめなんだ。だども、あのおい、がつんと、かいだら、【ななな】が、にげていった、みたい。あのくすりは、なんなんだい。おしえてくれよ。【ななな】に、やられそうなどもだちの、予防注射（よぼうちゅうしゃ）に、したいんだよ」